

Ⅱ 中学生の読書傾向からみた若干の問題

織 田 長 繁

1. はじめに

ここに記すのは、研究紀要第19号（前号）の内容を補ったものである。前号においては、生徒の読書傾向をとらえる資料が1学期と夏休みの前半に限られていたのを、昭和49年4月から50年3月までの年間を通しての資料に改め、読書傾向を少しでも正確に捕えようとした。

研究の目的は前年度と変わっていない。本校生徒の読書傾向の大勢を押え、それを以って生徒指導の一助となしうるならばと考えたからである。その動機は、かつて反社会的行為を示した生徒の読書の傾向が、他の生徒と著しく異なっていたことから、指導した教師としての反省に求められる。従って読書傾向を探るには学習や諸行事との関連上、最少限1年間の資料は必要であり、少くともその年度の傾向は捕えられるであろうと考えたからである。

また前号と同様にこの研究には、いくつかの限界があること、その主なるものを記せば

1. 読書だけが生徒の思考力や思考方向を決定するわけではなく、他の影響がかなり大きいこと。
 2. 学校図書館に整えられている「個人カード」に本人が記した書名を資料にしていること、これは不確実な記憶によらないと言うプラス面がある反面、図書館以外の本も読んでいるであろうために、読んだ本の全貌を把握できないと言うマイナス面があること。
- 大きく言えば上の2つの欠点は持っている。また別の立場からすれば、読書の内容（図書の類別）上からの検討を省略し、読んだ者の外形面な冊数だけの検討に焦点をしばったこと、読まない者への検討がなされていない等の弱点があることも承知している。これらの諸点に関しては後日に譲るつもりである。

本校は中学校と高等学校が併置されているが、運営はできる限り一体化している。従って図書館も一体化し、中学校と高等学校を結ぶ廊下の部分に設けられ、開架式をとり、休日と休暇は閉館する以外は大体使用できるようにしてある。館外貸出はテスト開始1週間前からテスト中、春の休暇、必要な整理など特別の場合を除いて毎日行っている。平常の貸出は1回3冊までで7日間を期限とし、休暇の場合（春を除く）は1

人5冊までを始業式を返却日としている。貸出と返却は各クラスから選出された図書委員が担当し、図書部教官と司書が指導している。

2. 一般的な立場から

49年4月から50年3月までの1年間を通して2203冊が貸出されている。貸出書以外にも館内で多くの図書が利用されているが、その実数は捕え難い。貸出された図書の総数を月別に区分した率は、6月14.7 12月13.4 5月12.9 7月11.9 以下11月10月8月が多い方で、1月5.3 2月6.3 9月8.6 が少ない方である。6月と12月を頂点とする2つの山があり、4月5月6月7月の4か月が前半の山で、47%が貸出されている。ただし7月には夏休み中の長期貸出の分を含んでいる。後半の山は、9月以後次第に上昇して12月が頂点で、1月2月は12月の半分以下となっている。7月と12月を比べると12月の方が多くなっているのは、冬の方が夜間も長く、運動量も少なく室内にいる時間が増しているからであろう。

貸出した者は全生徒の86.5%（男女計）で、学年進行と共にその率は低下し、1年97.8%を最高として3年で77.6%である。男子よりも女子が12%上廻っているのは一般の例と同様である。内容（類別）上からは女子は殆んどが文学または文学関係書であるに対して、男子は文学もあるが物理・歴史・生物・総記・思想等も含まれていて、巾の広い読書を示している。

以上の読書総数を、1冊も貸出しなかった者を含めた全生徒1人当たりで計算すると8.4冊で、1年生では10.2冊 2年で9.1冊 3年で5.8冊となって、学年進行に伴う読書の減少が理解される。男女別でみると男子は5.0冊女子は12.1冊で、女子は男子の倍以上の読書量を示している。しかし実際に貸出した者1人当たりの冊数は2年11.1 1年10.6 3年7.7となる。2年の1クラスは男女間の偏りが著しく、男子で1.4女子で18.2で共に下限と上限を示しているが、このことが全体としては2年が1年を上まわる結果になっている。男女については男子6.2冊女子13.3冊である。個人的な最多冊数は女子（1年）で73冊、男子（2年）で34冊で、偶然であろうがここでも男子は女子の半分以下となっている。

このように見ると、中学校の場合には学年進行に伴って読書が減少し、女子は男子の2倍以上の冊数を示している。本校のように受験対策1本やりでない場合でも3年生の読書が減少しているの、受験対策が相当行われている公立学校での3年生の読書は相当に減少しているのではなからうか。読書がすべてではないにしても、相当に進んだ理解力を持つようになって3年生の読書が1時的にもせよ減少していることは、由々しい問題を含んでいるのではないか。読書だけが人間形成や思想充実を司るものではないが、図書館に關係する我々にとっては無視できない性質の問題と思う。もっとも1・2年の乱読から精読へと読書の傾向が変わったとも考えられるが、これについては別の機会に調査してみたいと思っている。

3. 部と評価との立場から

読書を学校生活の重要な要素である「部」と「成績評価」の2点の立場から見るとどうなるであろうか。本校では「部」活動は放課後に行われる活動で、自由参加の方針をとっている。部は体育系と文化系に区分され、活動は週2回以上で、その時間は季節によって異なるが概ね2時間30分程度である。

体育系の部に属しているもの（以下体育系・文化系と略記）と文化系、何れの部にも属していないもの（以下無部と略記）をその区分に従い、学年を通じて1人当たり平均冊数を示したものが別表1である。体育系7冊文化系14.8冊無部8.7冊となって文化系の多いのが理解される。文化系が多いのは部活動自体の中に読書を要する場合があろうし、体力の消耗がないために生れる余力が主な要因であろう。体育系と無部を比べると、1冊弱の差で無部が上まわっている。授業が終れば「部」活動の拘束を受けることなく、時間と体力の両面から最も余裕のあるのが無部である。しかし無部の者は余り読んでいない。読書が嫌いなのか、嫌いでなくても面白さや意味付けが理解できないからなのか、意欲がないのか、読みたい本がないからなのか、または塾に通うとか好きなことに時間を割いているのか、読書しない理由は単純なものではないと思う。広い立場や種々な角度から掘下げてその事情を考え、それをふまえて余暇の積極的な利用を指導する必要がある。次に部と学年を併せてみると、体育系文化系無部ともに読む冊数は異っているが、学年進行につれて読書がやや減少している傾向があり、3年生では著しい減少となっている。体育系と無部では1年2年共に僅少差で殆んど同じとみていいが、それぞれが8冊台と11冊台となっているのは偶然の一致か、或いはこの辺の冊数が限界なのかもしれない。これに対して文化系は著しい差がある。文化系の人数が少ない上に男子が極少

数のために、女子の結果が表われているわけであるけれども、余りにもはっきりした減少の傾向が示されている。

先に無部が読まない旨を述べたが、1年2年をとり上げると体育系を上廻っている。この数字は年間を通じてのもので、3冊前後の差である点に問題が残っているように思う。

評価を中心とした立場からみるとどのような傾向が見られるかを考察したい。ここに言う「評価」は、49年末に10段階（本校では5段階を細分化して10段階で表わしている）で示された評価を合計したものを素点とし、全校統一的な数値を以って偏差値に換算し、これを基準として5段階に改めて評価し直したものである。この方法で評価された人数比は、評価5のもの（以下〔5〕と略記）以下順に6.9% 26.6% 39.8% 19.3% 7.3%となっている。

この評価の各段階にある全員の読書量を集計して得た1人当たりの冊数は、〔5〕17.8冊〔4〕9.7冊〔3〕7.8冊〔2〕7.9冊〔1〕5.6冊となって、評価に比例すると言える結果が出た。〔5〕は〔1〕の3倍の読書をして18冊弱であるが、これは〔5〕が種々の面からみて高い能力があり、それだけに余力を生み易く、その力を読書に向けられるし、また種々の読書によって身につけた総合的なものが学習を豊かなものにして成績を向上させると言う因果関係があるのではなからうか。学年を中心にした場合には2年生は評価に比例し（〔5〕26.8冊〔4〕10.1〔3〕9.1〔2〕7.9〔1〕3.4）、1年生もまた〔3〕と〔2〕の順が1冊弱の差で逆になっているだけで比例している。男子女子に分けてみても、1年2年の女子は全く比例し、2年男子は〔5〕が0名であることを除くと〔4〕以下は比例している。1年男子は〔2〕が最も少なく〔3〕と〔1〕とは同数であるけれども、〔3〕〔1〕と〔2〕の差は1.0冊であるから、ほぼ比例していると言えよう。これをまとめると1年女子では〔5〕〔4〕と〔3〕〔2〕と〔1〕に、2年女子は〔5〕と〔4〕〔3〕〔2〕と〔1〕のそれぞれ3段階に分けられ、1年男子は〔5〕と〔4〕〔3〕〔2〕〔1〕2年男子は〔5〕を除くと〔4〕〔3〕と〔1〕と〔2〕になる。2年男子の〔1〕と〔2〕の差は1.8冊あるが、殆んどの場合に評価と密接な関係のあることがうかがえる。3年生については異った型を示している。これを示したのが別表2である。男女に共通しているのは〔3〕が比較的読んでいないことで、それが何を意味するか不明であるが、3年生全体として評価段階の差が少ないことから考えて〔3〕〔2〕〔1〕は余り読んでいないと言ってもいいと思う。

再び全体を通して、男女差を見ると特別な場合を除くと女子の読書量がすぐれているし、最も読む段階と次によく読む段階（大部分は〔5〕と〔4〕であるが〔4〕

と〔3〕の場合もある)の差が相当あることも理解される。例えば1年男子の場合は4倍弱、3年女子と1年女子で2倍2年女子で1.5倍はその例である。

4. 部別と評価との関連から

今までは部別によるものと評価別によるものを個々に切離して、特徴をのべた。この両者を関連させるとどのようなになるであろうか。体育系・文化系・無部と5段階評価をくみ合わせると複雑になってくる。また学年別・男女別・部別・評価別の一覧表を作成した結果は、0名の欄が相当数に上るし、1～2名のように少ない場合もあり、特に文化系が全体として少数であること等からみて、比較すること自体に果して意味があるのか否か、妥当なのか否かは疑わしい。しかし上述の一覧表の中から見られる傾向と思われる点をまとめてみることにする。

大体誤りなく言えそうなことは、読書量の点から見ると、部活動に加わっているいないに関係なく、また部の種別にかかわらず、評価に関係をもっている傾向が強いらしいことである。換言すれば体育系文化系無部に余り関係なく、〔5〕が多く続き3年無部の〔1〕を除けば〔1〕が最低らしいと言うことである。

学年を通じて見ると、体育系は〔5〕が19冊強とまさり、12冊の差で〔3〕〔4〕〔2〕〔1〕が続いているが、〔3〕以下の差はそれぞれ1冊弱であり、余り差はない。文化系にあっては少数のために比較できにくいけれども、〔5〕が19冊強とまさり、12冊の差で〔3〕〔4〕〔2〕〔1〕が続いているが、〔3〕以下の差はそれぞれ1冊弱であり、余り差はない。文化系にあっては少数のために比較できにくいけれども、〔5〕が40冊弱で第1位、これに次ぐものが20冊強の〔4〕であり、以下〔2〕〔3〕〔1〕の順である。〔4〕以下の差は5冊とひらいている。無部も文化系と同様に人員の分布が片寄ってはいるけれども〔5〕が14.5冊で第1位、3冊強の差で〔4〕が続く、以下〔1〕〔2〕〔3〕の順を示している。〔4〕以下の差は2冊前後となっている。ただし〔1〕が第3位に来ていることは大差でないけれども注意したいし、特に〔1〕は1年2年に該当者がなく3年生だけの数字であることも指摘しておく。この両点においては、後で述べることにする。部を中心にした場合には以上のように、無部3年〔1〕の場合を除くと大体評価に応じていえると言えよう。

立場を変えて学年別を中心にしてみると、1年にあっては〔5〕が部にかかわらず最も多く続き(体育系21.3冊 文化系39.5冊 無部14.5冊)、特に文化系が各評価段階全体にわたって読書に親しんでいるけれども、その中では〔3〕が劣って9.5冊となっている。体育系と無部では〔5〕が続いているのが、ほぼ同数の

〔4〕〔3〕〔2〕である。正確に記すると〔4〕〔3〕〔2〕の順で体育系は7.9冊 8.5冊 7.8冊、無部では11.5冊 9.9冊 12.7冊となっているが、その幅は共通して2.8冊しかないので、ほぼ同数と見てよい。2年は0名や1名の欄があるので比較が困難であるが、〔5〕を除くと無部の〔4〕が17冊強で最も多い。これに次ぐのが文化系の〔4〕〔3〕、無部の〔2〕と体育系の〔3〕、読まない方では体育系の〔2〕と無部の〔3〕と言う様に統一制がない。強いて言えば無部の〔4〕〔2〕と文化系の〔3〕〔2〕が読むといえよう。

3年生も又文化系が少ないので比較が困難であるが、〔5〕を除くと、無部の〔1〕、次いで体育系の〔2〕が多いけれども、無部〔1〕でも僅かに8.7冊と低調である。体育系にあっては1年2年のように〔5〕とそれ以下の評価の者との差が少なく、大体同じような読書量(〔5〕9.3冊〔4〕4.7冊〔3〕6.0〔2〕7.3冊〔1〕5.3冊)であると言ってよい。3年生においては前述した通りに、無部〔1〕が多いことに注意したいと思う。1年2年3年でそれぞれ無部に相当する人数比は16.0% 21.9% 31.8%となって3年生が最も多く、3年生では〔5〕の該当者が0名である。従って〔4〕～〔1〕の間に集中しているのも、十分とまではいえないにしても妥当な平均値が出ていると言える。

このような条件の下で3年無部〔1〕が、部別・評価別の中で体育系〔5〕に次いで2番目に多く読むのは何故かを考察するのは無意味ではあるまい。希望する進学先との関係からか、平常の学習への半ばあきらめ的な気運からか、また何等かの事情で読書に親しみを持ったからかその種々の要因は考えられる。しかも部に属していないことを併せた場合には要因の追求よりも、1年2年の様に評価に関係のある読書の段階から抜け出していこうとする方向を取っているらしいことに意義を見出したいと思う。この辺に精神的にも成長してきている姿が出てきているのかも知れない。

5. ま と め

以上いくつかの視点から生徒の読書を見てきたが、1人当りの読書量を基礎にし、内容の点には触れていない平面的なものである。その中から総合的にまとめて、これが特色であると言い切れるものは少ないが、49年度においては次のような傾向があるらしいと言う程度で記しておく。

1. 読書と学業成績とはかなり密接な関係があり、また女子が男子よりもよく読んでいる。
2. 学年進行につれて読書の量は減少しているし、特に3年生にその傾向が著しくなっている。受験などがその要因ではあろうが、残念な気がする。
3. 部活動をしてない者の中で特に1年2年に対して

は、読書を含めての余暇の利用についての指導が必要なのではないか。

4. 1年2年と3年の間には差がある。その差は精神年令的発達その他に基くものであろうが、この点に著目して、読書だけではなく幅広い指導が望ましい。

この考察を行うに当って読書の内容に触れていないことは今までに述べた通りである。この点が大きな弱点であることは承知している。従って今後の私の考察

に当っては、何を讀んだかの問題を取入れた上で、今年度の内容に結び付けていきたいと思っている。同時にここに記したのは49年度だけの問題であったものを拡充し、学年進行に伴って読書量がどう変化し、どのような内容と方向の読書をしたかを探るのが次の課題になってきた。しかし読書には個人差が激しい。この個人差を全体の中でどう位置付けてみるかも、難しい問題ではあるが触れて見たいと思っている。

別表 1. 部別の1人当り読書数

	体育系	文化系	無 部
1年	8.7冊	21.1冊	11.4冊
2年	8.2	12.3	11.3
3年	6.3	3.4	5.6
計	7.8	14.8	8.7

別表 2. 3年生の評価別・男女別1人当り読書冊数

	{5}	{4}	{3}	{2}	{1}
男子	7.6	8.4	3.9	5.1	4.0
女子	13.5	6.4	7.2	8.7	8.8
計	9.3	7.7	5.5	6.7	6.7

参考. 部別・学年別・評価別の1人当り読書冊数

	体 育 系			文 化 系			無 部		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
{5}	21.3	20.8	9.3	39.5	/	/	14.5	/	/
{4}	7.9	7.5	4.7	25.5	/	0	11.5	16.8	5.3
{3}	8.5	9.4	6.0	9.5	14.3	4.3	9.9	5.0	5.0
{2}	7.8	5.6	7.3	11.5	13.3	/	12.7	10.0	5.7
{1}	5.4	3.3	5.3	/	4.0	/	/	/	8.7

注 /は該当者が0名の場合

0は該当者はいるが読書数が0の場合